

## 編集室から

今夏の暑さは、半端ではありません。初夏から既に猛暑が続き、皆様もバテ気味かも知れません。その中でも秋の虫が鳴き始めたり、空の雲の様子が変わってくるなど、秋の気配は着実に迫って来ているようです。

毎年、正月を過ぎる頃に我が家では、旬をやや過ぎた富山湾の寒ブリを仕入れ、塩漬けにし、稲わらなどで巻いて軒先に吊るす「巻鰯」を作っています（表紙写真）。昨年正月に能登半島地震で被災しましたが、それでも伝統行事として続けてきた巻鰯は諦めることなく、作り、吊り下げました。そしてそれが完熟する頃、ちょうど能登では稲刈りシーズン。打ち上げの食卓に、巻鰯のスライスが並びます。

近年では、富山湾の海洋深層水から作った塩をウイスキーのマザー・ウォーターよろしく使うことで、よりまろやかな味わいになることを発見して、悦に入っています（笑）。

さて、今年は被災した隣家が公費解体され、跡地に新しい住宅が建設中ですが、その影響でこれまで日陰だった巻鰯の吊り定位置がカンカン照りの場所になってしまいました。このため、例年より乾燥・熟成が進み、やや硬めの仕上がりになっている模様です。ですので、少し早めにご近所・知人を招いて「巻鰯の宴：復興バージョン」を催すことにしています。

これから食すものは、今年の正月製ですが、昨年被災直後に作り、食べる時期を逸してしまっただけで、昨年秋から下がったまま一本。巻鰯を説明するためのモックアップにするしかなさそうです。

全国的な猛暑・酷暑だけでなく、大気的不安定さから、ゲリラ豪雨も各地を襲っています。能登のみならず、被災各地では、復旧・復興が進められていると存じますが、気候に負けない身体を保って、事に臨みたいものです。（は）



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2025/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2025/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 長 月



地域伝統食 巻鰯  
能登 薬師の里にて  
by hama

**復興するぞ！  
能登・北陸**

前回に続いてステイグマの話をする予定でしたが、予定を変更して八月十九日から二十三日まで参加してきた小児1型糖尿病サマーキャンプの話を書きます。鳥取県の大山の麓に鳥取・島根・山口・広島そして香川から、1型糖尿病を持つ小学1年から中学3年までの十六人が集まりました。これまで何度も触れてきましたが糖尿病には1型と2型があり、1型糖尿病は膵臓でインスリンを作っている細胞が自分の免疫システムから間違えて攻撃されてしまい発症します。日本では糖尿病全体の5%ほどで、小児期に多いのですがあらゆる年齢で発症の危険性はあります。

◎

インスリンを作る細胞が急速に壊されてしまうので、外から注射で補わねばなりません。以前は一日四回注射でしたが、今回の参加者はほとんどがインスリンポンプを装着していました。子供達は全員が持続血糖測定器(フラスチック製の五百円玉くらいの大きさで一分おきに血糖測定をしています)を装着していて、そのデータがポンプに飛んでインスリン注入量を自動で調節してくれます。このハイテクポンプが使えるようになって一年半ほどですが、高血糖や低血糖の昏睡が無くなっただけでなく糖尿病予備群に近いほどの極めて良好な血糖管理も可能になりました。

りました。

◎

そのおかげで、キャンプの様子はガラリと変わりました。キャンプに参加して三十年近くになりましたが、今までは目先の血糖をいかに調整するかに追われていました。今回は、その子がどの程度ポンプを使いこなせているのか、妨げになっているもの(甘えなど精神的な未熟さ・知識の不足など)は何か、成長を促すためにどうすれば良いかなど個々の子供に応じたディスカッションを医師・看護師・栄養士等で深めることができました。私が主治医をしている小学生と中学生の男の子についても、小児科の医師から貴重なアドバイスを頂きました。当たり前ですが、子供は成長していきます。うまくサポートできれば、こちらが驚くほどの成長を見せてくれます。かつてキャンプの大山登山でワガママを爆発させて数人がかりで抱いで下山させた子が、学生ボランティアで参加してポンプでキッチリ血糖管理しているだけでなく、子供たちの優しいお姉さんになってくれていました。これだから、キャンプはやめられません。



「プロフィール」  
（いがぎ としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

### 濱の起業塾 七十七 『リスク対策②』

昭和期、小学校の玄関横には薪を担ぎ、書物を手にして歩く時間も惜しんで学びを深めていた二宮尊徳の像があった。時代は流れ、価値観の変化によってその像は批判にさらされ、徐々に姿を消していった。

今では、彼が何をどのように考え、行動し成果を挙げ、我々にどのような教えを遺していったか、ほとんど知られていないのではないか。このことが、目先の利益ばかりを追い求め、経世済民など何処へやらの風潮の根底原因のひとつになっている気がしてならない。

静岡県掛川市。掛川城のすべそばに、大日本報徳社という施設が遺されている。その門には道徳門と経済門と彫られた門柱が、左右に立っている。この言葉こそ、二宮尊徳の教えを象徴的に現している。

その教えの詳細は、諸兄による書籍の数々に委ねるが、分かりやすい地域課題解決に留まらず、地域の状況に大きな変革の流れを与え、成果を挙げた方々の弁には、かならずと言ってよいほど、経済と道徳・倫理の概念が流れている。

偶然ではあるが、今月号の溝口氏の「隠岐・海士町」の話は、まさにこの二つの視点を柱とする地域経営のあり方が、地域に与えた影響について、触れていただいている。

地域を再生しようとするプロジェクトのプロデューサーやマネージャーは、この二柱を軸とした自らの地域における地域経営のあり様を、常に自覚し関係者にも広め、意識合わせを続けなければ、前号で触れたように、いつの間にかあらゆる方向に舵が切られてしまい、泥沼にハマる事態を招きかねない。

地域再生や、地域課題解決の現場には、自然と多くの関係者の方々に関わっていただくことになる。白川氏のしろにし(和歌山県有田川町)の事例紹介では、これからその辺りに触れられることと思う。

プロジェクトの構想自体は秀でていても、それを実行に移すプレイヤーそのものの存在と、その意識の深さや、プロジェクトへの共感・共鳴レベルが成果レベルにもものをいう。

プロジェクトの中核に居る人間やその周辺人物たち自身が、プシテいては改革など始まらない。

## 『 浮き草のごとく132 福井大学 国際地域学部 講師 江川 誠一 『 迫り来る生成AI（学生のレポート作成への活用実態） 』』

8月のお盆明け、担当科目の採点が全て終了。まず出欠をシステムから確認。次に、複数回のミニレポートと最終レポートを評価。そしてこれらを加重平均し素点をつけていく。重み付けについては、学生へ最初に示すシラバスに書く必要があり、それに忠実に準じて実施。なおテストは実施していない。

基本は、シラバスに明記した到達目標についての絶対評価である。ただし記述式レポートの評価は、合否水準はある程度定められるものの、点数のさじ加減が非常に難しい。私の場合、受講生全員の平均点のターゲットを概ね決めたと、相対的な比較により素点を振っている。ならばマルバツ式にすればいいと言われそうだが、難しくもあり楽しいのが記述式答案の採点作業である。

レポートへの生成AI使用がまあまあ普通になってきた。一昨年はそれに詳しい一部の学生のみだった。去年はそれと分かる答案がちらほら混じり、今年は自然な感じで使ってくるようになった。もしかすると、私自身の生成AIリテラシー（活用能力）が、この時系列の認知に影響しているのかもしれない。

レポート作成に使うのは構わない。テーマや仮説の設定、その検証、提案、そしてプレゼン等の各段階において、初期の思考は人が行い、生成AIを使ってそれを構造化・チューニング・もれダブリチェック等を行うような方法が現時点での理想形だと思う。それに近い方法で、面白いアウトプットを仕上げてくる学生も。個別に話を聞いてみると、壁打ち相手として生成AIを上手く使っているようだ。今のトレンドを学生から直に教わる。教員の特権である。

ただし、次のような使い方はあまりよろしくない。

- 生成AIが主、学生が従（一番ダメ）
- 与えられた外形を無意図でそのまま使用（去年はこれが多かった）
- まとまっているが驚きがない（今年はこのが多い）

一方で、生成AIに頼らず仕上げてくる学生もまだまだ多い。それで面白いレポートが書ければいいのだが、論理性に欠け、粗く、見栄えもしないものもある。生成AIで壁打ちして書き直してこいと言いたくなる。数年後、そのような学習形態に加え、さらには作問&採点も生成AIが行うケースがスタンダードになるのかもしれない。教員の仕事は大きく形を変えるだろう。それまでの間、なんらかのオリジナルな意思を伝えようとしていれば、無味乾燥な生成AIを主とした綺麗なレポートよりも、私は評価してあげたいと思う。

## 『 過疎集落が取り組む地域再生への道06 』 （一社）しろにし 理事 白川 晶也

毎月、こちらに原稿を寄せるにあたり、その都度iPhoneのカメラロールを見ながら当時のことを振り返ります。記憶力が著しく老化してしまっているのが困ったもんです…（泣）

本清水地域ランドスケープ再生戦略事業では、弊社しろにしの設立および拠点施設整備だけではなく、新しい温浴施設や交流拠点となる公園整備を含む主に3つの柱について議論し取り組んできました。こう書くと、まるですべての目的が“ハコモノ”整備だったように聞こえますが、決してそうではありません。すべて住民の想いや目的があって、住民自らが動かしていくツールとして、新温泉や公園整備に苦勞しながらも繋げることができました。しかし、カメラロールに残る写真を見ると、予想以上に動いているもの、逆に止まっているものなど、その後の状況はさまざまです。ハコモノ整備って完成がゴールではなくて、そこからスタートなんですよね。このあたりについては、また時を改めてお話ししたいと思います。なにせこの夏から、その温浴施設等を運営する一般財団法人の副代表も仰せつかってしまったので…（泣）

さて、当事業もスタートから半年が過ぎ、目標とするスケジュール感も翌2021年度に設計、2022年度に工事・運営法人設立という流れで目指すこととなりました。以前にもお話ししましたが、当初の目的は単なる“賄い付き共同社員寮”の整備。しかし地域の再生に向け、当施設に盛り込むべき機能とは何か、旧校舎の中で活用できる部分はどの範囲か。そして何より、設立を目指す新法人の役割は社員寮の運営だけではないはずで、それはいったい何なのか、そして何をを目指すのか。

現施設を所管する役場担当部局などとの調整も含め、そんな議論を重ねます。そして、年度末には行政や議会のみなさまのご理解もいただき、いよいよ設計業務と当事業2年目にかかる新年度予算が認められることになりました。活字にしてしまえば簡単ですが、順調に事が進んだのも地域事業者の熱意があったからこそ。

そして事業2年目。具体的な議論に入っていきます。「2階を宿泊者向けフロアにして、共同社員寮となる個室部分にこっちの3教室分を充てようか」「就農や就業、遊びも含んだ各種体験向けに短期宿泊ができる部屋も欲しいよね」「1階には居住者と地域のみなさん、外部からのお客さまが交流できるスペースも欲しいし」などなどアイデアが浮かんでいきます。

しかしある時、ふと気が付くことになりました。

「…これ、自分ら男性ばかりで考えてたらアカンのちゃうか!？」（続く）



## 『相模の国から ～大魔神のたび～ 』海士町への旅 (2025.6.23~25) 茨城県境町 参与 溝口 久

8年ぶりに、隠岐の島にある海士町を訪れることにした。境まちづくり公社の野口社長から「年に一度は視察研修へ連れて行って欲しい」というリクエストがあり、今回は海士町に決めた。

海士町との出会いは今から28年前、私が由布院観光総合事務所の事務局長を務めていた時に視察で訪れてくれた時ことだ。当時の海士町は、島前高校が廃校の危機に直面し、生き残りをかけた大事な時期だった。高校が無くなるということは、高校進学時に家族を挙げて島から出ていくことに繋がる。人口が加速度的に少なくなることを意味する。正に島おこしのヒントを得に由布院に来ていたのである。

これを縁に島を訪れるようになり、今回で四度目の訪問となる。海士町は島根県の沖合 60km、隠岐の島の近くの離島。かつては財政難、過疎化に悩む町だったが、2002年に山内氏が町長になり、行政改革と産業創出を断行。4期 16年務めた後、2018年に大江町長にバトンタッチしてからも、海士町は「地方創世のトップランナー」として快進撃を続けている。その山内氏は昨年1月に他界した。

大江町長は、山内前町長への弔辞で以下のことを語っている。

山内さんが町長就任直後の職員への訓示の一節「役場は住民総合サービス株式会社である。町長は社長、助役は専務、管理職は取締役、職員は社員で、町民は税金を納めた株主であって、そのサービスを受ける顧客、即ちお客様である。従って、地域経営は企業経営と同じである。」そして、「自立・挑戦・交流」を町政の指針に掲げ、課長以上で構成する経営会議の導入をはじめ、年功序列の廃止や現場主義を唱えた適材適所の組織再編など、これまでの行政では到底考えられない様々な改革を矢継ぎ早に打ち出し、スピード感を持って実践された。また、平成の市町村合併の嵐が襲いかかる中、「自立への道」を選択した平成15年の12月。覚悟の単独町制を決断され、「自分たちの島は自ら守り、島の未来は自ら築く」という強い信念の下、官民が一体となって「海士町自立促進プラン」を策定し、島の生き残りをかけた大改革が始まった。それは、徹底した行財政改革で「守り」を固める一方、「攻め」の方策として新たな産業創出を強力に推進する、両面作戦の展開であった。給与カットのことがメディアで大きく取り上げられたが、こうした攻めが無ければ縮小消滅の道をたどることになっていた。

今回の旅の話に戻す。6月23日(月)、羽田空港7時10分発の便で出雲空港へ向かい、出雲からプロペラ機に乗り換え島後島にある空港へ降り立つ。「隠岐世界ジオパーク空港」である。ここから西郷港へ移動し、さらにフェリーで約1時間、海士町へと渡った。

港には交流促進課の柏谷さんが迎えてくれ、役場庁舎へと案内される。庁舎に入ると驚いたことに、一階全体がコワーキングスペースとなっており、多くの若者がパソコンを開き仕事をしている。聞けば「大人の島留学」という制度で、現在20代

の若者140人が地域おこし協力隊制度を活用し島で働いているという。

柏谷課長から海士町の取り組みについてプレゼンを受けた。「都会のような便利なものはない。でもなくてもいい。人が生きていくために大切なものはすべて島にある。ないならつくる、みんなで創る過程にこそ意味がある」が海士人の心意気だ。サザエカレーに始まり岩牡蠣の養殖、干しナマコの生産・輸出、隠岐牛のブランド化、若者との交流によるまちづくりへの挑戦、教育魅力化によるひとづくり、海士町独自の挑戦が次々と紹介された。

特に興味深かったのは「半官半X」という仕組みで、公務員が地域課題の解決に挑むスーパー公務員育成を目的とし、条例まで制定している点だ。また、滞在人口を増やす「大人の島留学」は、2020年に21名から始まり、2025年には180人を超える見込みで、住宅不足が課題となるほどの盛況ぶりだ。

その夜は地元の「隠岐牛」をいただきながらの懇親会を開いてもらった。

二日目は柏谷課長の案内で町内を見学。まずはAMAホールディングス(株)の社屋。この会社は町が100%出資する第3セクターだ。業務はふるさと納税、未来共創基金これにより環境・教育・地域づくりにおける挑戦者を支援する等だ。ここでは多くの若者が島留学で来島し、社会人経験を活かしながら働いていた。

目の前の海には岩牡蠣の養殖場が広がり、冷凍技術「CAS」を活用しふるさと納税他全国へ出荷している。

次に訪れた日本名水百選の湧水地では、境町の野口社長が「ボトリングして返礼品にしよう」と提案。昼食をとるため船のターミナル「きんにゃもんにゃセンター」へ戻ると、売店で働く女性がかつて境まちづくり公社に勤務していたことが判明し、偶然の繋がりに驚かされた。

午後はホテル「Entô」を訪問。このホテルはジオパークの拠点も兼ねており、デザイン性も高く、インバウンド向けのスイートルームも備えるなど、新たな観光戦略の要となっていた。その後は海中展望船「あまんぼう」に乗り込み、約1時間かけて周辺を巡り、美しい海を堪能した。

最終日、冬タイヤでの減便のため、朝9時前の高速船で海士町を離れ、隠岐の島へ戻ることとなった。山内町長から大江町長へと引き継がれた海士町は、さらに進化を続けており、今回の訪問でも多くの刺激と学びを得ることができた。

数年後、この島の成長を確かめに訪れたい。そんな思いを胸に、島を後にした。

